

帝京科学大学大学院バイオテクノロジー研究センター完成予想図



学科の壁を越えたカリキュラム改革 - 複合履修プログラム -

帝京科学大学 副学長 瀧澤 博三 (e-mail: takizawa@ntu.ac.jp)

大学への進学率や合格率が高くなってくるとともに、近頃は大学全入時代到来の予想が大学にとってばかりでなく社会全体にとって困った問題であるかのように議論されている。大学が身近になり、希望する誰もが大学に入学できるということそれ自体は悪いことであるはずがないのに、なぜなのだろうか。

進学率の上昇に伴う学生の多様化が学生のニーズや期待と大学教育とのミスマッチを増幅しているのではないかと、これ以上の大学教育の普及に大学はもはや適応できなくなっているのではないかと、進学率の向上は日本の社会にとって本当によいことなのだろうか、といった不安を人びとが感じはじめているからではないだろうか。進学率の向上が人びとの幸福と社会の発展につながっているという実感を持てるようにすることが大学改革の目標でなければならないと私は思っている。

帝京科学大学では教員も職員も、大学はもっと変わらなければいけないと真剣に考え、改革を進めてきた。まず最も大事なことは、1人ひとりの学生をよく理解し、適切な学習上のアドバイスをできるようにすることだと考え、全教員が参加して本学独自の助言教員の制度を立ち上げた。次の課題は、学生が高校教育から大学教育へとスムーズに移行できるようにすることであり、このため助言教員によるフレッシュセミナーや能力別の少人数クラスによる基礎教育と演習の充実などを行なった。

専門教育についても逐次改善を図ってきたが、来年度からの実施をめざして検討していることは、学生が個々の適性や志望に応じて適切な科目選択を行えるよう学科内に複数コースを設けることや学科間の壁を越えて他学科との複合的な履修を可能にすることなどである。将来の職業に必要な能力を考えると、専門教育を特定の学問分野の枠内にとどめる理由はないし、これからの技術者には複眼的な広い視野と能力こそが必要不可欠と考えられる。このため本学では理工学部の4学科が一体となり、各種の職業資格も視野に入れながら多様な学生のニーズに則した学科横断的な各種の履修プログラムの準備をすすめている。本学のカリキュラム改革の全貌についてここで説明するゆとりはないが、このニューズレターの前号と本号でその概要をご理解いただけるものと思う。

大学は高校教育から学生を受け継ぎ、社会へ送り出す機関である。その教育の改善のためには、高校の先生方と企業をはじめ社会の声に耳を傾けなければならない。本学がその社会的な使命をよりよく果たしていけるよう関係の方々のご支援・ご協力とご助言をお願いしたい。

発行人：帝京科学大学(TUST)
学長 小林 靖雄
〒409-0193
山梨県北都留郡上野原町
八ツ沢 2525
TEL：0554-63-4411
FAX：0554-63-4430（本館）
4431（実験研究棟）
帝京科学大学ホームページ
<http://www.ntu.ac.jp/>

電子・情報科学科 - 平成 12 年 4 月「メディアサイエンス学科」へ名称変更 -

電子・情報科学科 学科長 高橋 清 (e-mail: takahasi@ntu.ac.jp)

電子・情報科学科では、電子工学とコンピューターサイエンスを車の両輪としたカリキュラムを編成し、次世代を担うコンピューターのハードにもソフトにも強い研究者と技術者の育成をめざしてきた。しかし、本学が創立されて以来この 10 年、インターネットに代表されるネットワーク技術の展開とパソコンの一般家庭への普及はめざましく、電子・情報科学の分野でネットワーク技術やマルチメディアコンテンツ作成技術などの相対的な重要性が急速に高まり、また、本学科に入学してくる学生諸君もこれらの分野に高い関心と興味を寄せるようになった。

本学科では、このような変化に対してカリキュラムの見直しを進めた結果、来年 4 月から学科の名称を「メディアサイエンス学科」へと変更するとともにマルチメディアやネットワーク関連の授業を充実させることとした。

さらに、マネジメントシステム学科との間の複合履修プログラムとしてスタートさせる「インターネットビジネスコース」では、これからのビジネス社会において必要不可欠なインターネットを通じた商取引についての実践的な学習環境を提供することとしている。このほか、環境マテリアル学科との間では「環境エレクトロニクス」、バイオサイエンス学科との間では「バイオエレクトロニクス」などの授業も検討している。

インターネット関連授業の紹介

電子・情報科学科 教授 谷戸 文廣 (e-mail: yato@ntu.ac.jp)

本年 9 月に大学内のコンピューターネットワーク(LAN)と教育に使うパソコンが一新されたので、インターネットに代表されるコンピューターサイエンスの分野の授業が全面的に見直され、レベルアップされる。この中から私が担当しているネットワーク技術と関連の深い計算機実習と演習の内容を紹介したい。

計算機実習 : 実習科目では、現在のネットワーク社会において顧客の管理や商取引の管理などに幅広く活用されているリレーショナルデータベースを学習する。データベースシステム ACCESS を使った実習を通して、リレーショナルデータベースの基本的な考え方である「テーブル」によるデータの蓄積、テーブル間を関係づける「リレーションシップ」、クエリーによるデータの抽出・集計・更新などを学ぶ。今後、インターネットサーバーと連携したデータベースシステムの運用法、あるいは表計算ソフトの Excel や Visual Basic などのアプリケーションソフトウェアとの連携など内容をより一層充実させたいと考えている。

UNIX演習: この演習では、ネットワークのサーバーなどを起動する基本ソフトウェアとして広く利用されている UNIX の基本的な使い方を学習する。具体的にはディレクトリー構造に基づくファイル操作、FTP などによる遠隔サーバーとのファイル転送、エディター Vi の基本操作などを実習して体得する。最近、LINUX に代表されるボランティアベースで開発された配布自由の UNIX がサーバー用の OS として脚光を浴びている。これらの UNIX は拡張機能を含んでいるが、基本的な使い方はどの UNIX もほぼ同じである。今回のパソコンの更新によって来年 4 月からは本学においても LINUX ベースで UNIX の演習ができるようになり、UNIX の特徴であるサーバー機能を活用した演習など、学生諸君の興味と関心に応じて内容を充実させていく予定である。

波長多重光アクセス方式の研究

電子・情報科学科 教授 山本 果也 (e-mail: ytakaya@ntu.ac.jp)

山本研究室の卒業研究のメインテーマは、あとで説明するような「波長多重」を用いた光アクセス方式で、それに関連するサブテーマをいくつか用意している。アクセス方式というのはネットワークの中で局からユーザー(加入者)を結ぶ足回り部分の通信方式である。

インターネットは WWW を起爆剤として爆発的な拡大をつづけている。個人ユーザーでも画像を多く含む情報を WWW で快適に操作するには現在の電話回線の伝送容量では不十分である。ビジネスユーザーの場合は加入者回線として伝送容量の相当大きい太いパイプが必要とされるようになってきている。

われわれの研究室では、各ユーザー宛の伝送容量が 150 メガビット(1 メガビット = 10^6 ビット)、600 メガビットといった大きな伝送容量を有する将来の光アクセス方式について研究している。その方式には、各ユーザーに波長を割り当て、局からユーザー近くのノードまでは 1 本のファイバーに複数のユーザーの波長を多重化して送り、ノードから各ユーザー宛に分波する波長多重方式を用いている。

この方式を採用すると経済的なシステムが実現可能となるが、そのためには解決しなければならない問題がある。例えば、ネットワークの波長制御をどうするか、通信サービスと放送サービスを同一のネットワークでどのようにして行かなどである。卒業研究ではこれらの課題について新しいアイデアを提案し、それらを検証するための実験を行なっている。実験では、半導体レーザーやファイバーはもちろんのこと、現在の最先端技術である半導体光増幅器、アレー導波路型回折格子分光器、エルビウムドープファイバー増幅器などの光部品を用いている。

このような研究を通して学生諸君は先端技術に触れるとともに、通信方式や色々なデバイスの動作など基礎的な知識を身につけると同時に、問題に突き当たった時の考え方や解決方法を学んでいく。卒業する頃にやっと研究の面白さが分かっていくのが残念といえば残念なことである。



【光アクセス方式の卒業研究風景】
実験机の上には光ファイバーケーブルが乱雑に張り巡らされている。

バイオサイエンス学科 - バイオサイエンスに取り組む4年間 -

バイオサイエンス学科 学科長 引馬 基彦 (e-mail: hikuma@ntu.ac.jp)

バイオサイエンス学科では、平成12年4月から学生諸君がそれぞれの興味と適性に応じて勉強できるよう「生命ダイナミックスコース」と「生命フロンティアコース」をスタートさせ、多様な講義科目を方向づける。これによって、学生諸君は履修プログラムが組みやすくなる。

それぞれのコースの専門科目は1年生からはじまる。入学早々の時期にまずバイオサイエンスの面白さを発見してもらったあと、バイオサイエンスの最先端を学び、他のコースの講義も聴いて、この分野の広がりを読んでもらいたい。学科の壁を越えて例えば、コンピューター関係の資格などを取得するため他学科の授業も履修できる。

コースの概要と専門科目

生命ダイナミックスコース: 外界の変動に耐え、種間の競争に生き残るためにダイナミックな対応機能をもつ生物の生命現象を学ぶ。専門科目として、生命をつくる無機元素、タンパク質の機能、細胞のダイナミクス、植物細胞のシグナル伝達、ヒト・動物の多様な感覚、植物の多様性、動物の生殖機構、ブレインサイエンス、バイオサイエンス実験などがある。

生命フロンティアコース: 個体レベルから遺伝子やタンパク質など生体物質のレベルまでを研究対象として生命の多様な形態と機能を学んで新しい未知の研究領域(フロンティア)を開拓するとともに、医療、産業、環境問題への応用について学ぶ。専門科目として、最近の遺伝子・生命工学、生物活性をもつ物質、食品素材の機能、微生物とバイオ産業、微生物を用いた環境再生、生物生産とバイオリクター、生体情報とバイオセンサー、人間活動の分析、バイオサイエンス実験などがある。

両コースの共通専門科目: 身近な化学物質、遺伝子の作られ方、生命とタンパク質、遺伝子情報の伝わり方、微生物の仕組みとはたらき、ヒト・動物の身体の仕組み、自然界のモデル化などがある。

バイオサイエンスの深さを知るには基礎学力が不可欠である。有機化学、生物化学などの基礎科目の勉強はこのほか大切である。2年の前期と3年の後期は、毎日、午後にバイオサイエンス実験が組まれている。これは実験技術を身につけ、講義で得られた知識を実際に確かめることを目的としている。

卒業研究は指導教員のもとで自分でテーマを選んで取り組むことになる。「タバコへのDNA導入による低温耐性の獲得」、「魚の体内時計と行動パターン」などテーマは多彩である。卒業研究の計画・実験・検討・発表を通して、学生諸君は理系の研究方法を習得する。さらに予測していなかった現象を発見して問題を提起する、大学院生などと激しく討論する、共同作業でチームワークの重要性を実感するなどの体験を重ねて、将来社会に出たときに必要とされる素養を身につけることになる。卒業研究に極力時間を割き、積極的に取り組むことを奨めたい。この機会に日頃から学生諸君に期待していることを3点記しておきたい。自信をもって討論できるバイオ専門分野をもつ、卒業研究、クラブ活動、就職活動などで「やった!」という達成感を体験する、生涯の友人を見つける。

卒業研究配属の季節 - 学生による先生の「きびしい評定」 -

バイオサイエンス学科 教授 長谷川 宏幸 (e-mail: hasegawa@ntu.ac.jp)

バイオサイエンス学科で必修の卒業研究では各教員に学生が割り当てられる。教員は13人であるから1人あたり10~13人の配属となる。学生から希望をとると当然のことながら希望する先生の研究テーマや人柄がそれぞれに異なるから人数にバラツキが生じる。学生の希望を尊重しながら成績などを参考に先生方は調整に当たるのだが、1教師の立場から忌憚なく言わせてもらえば、律義で成績のよいいわゆる「デキのよい学生」が多く希望してくれるに越したことはない。デキのよい学生が多いと研究室運営は楽だし、研究も進展する。

思い切って単純化すれば、学生諸君は「水準の高い研究室」と「ラクな研究室」の両極を好むようである。卒業研究の配属が近づくと学生の間では色々な「評判」が飛び交い、群衆心理も作用するらしく、年によって両極シフトのバランスが崩れることがある。結果としては、毎年コンスタントに良好な「票集め」をする先生、「苦戦」を強いられる先生、あるいは、年によって変動の激しい先生がでる。

先生方がデキのよい学生を集めたいと思っているとしたら、卒業研究の配属は学生によって下される先生への「きびしい評定」であるといえる。

最近、「営業努力」という言葉を耳にした。これは言い得て妙であると思う。教師が「デキのよい学生」を求めて営業努力に励み、学生が「デキのよい教師」を求めて右往左往する姿が見られる間は、バイオサイエンス学科は健全に発展しつつあるといえる。



(写真説明) 培養細胞による実験。1枚の容器に96の穴(ウェル)があり、それぞれ10万個の細胞が0.1ミリリットルの培養液に入っている。各ウェルに異なる濃度の薬剤を加え、作用させる時間を変えて結果を解析する。研究には持続する探求心、迅速な意思決定、抽象的思考に基づく構成員力、実験技法の習熟が必要だ。「デキのよい学生」であるほど教えやすく、研究の進展も早い。しかし、教師を選ぶのは学生である。

環境マテリアル学科 - 環境マテリアル学科のモットーと複合履修プログラム -

環境マテリアル学科 学科長 山崎 道夫 (e-mail: yamazaki@ntu.ac.jp)

平成10年4月に新しくなった学科名の中の「環境」は自然環境、「マテリアル」は材料のことである。われわれは原始人のように文明以前の洞窟生活にはもはや戻れないし、一方で、文明が環境を破壊するという脅威に直面している。

自然環境と文明の調和はわれわれの大きな課題である。われわれの学科は、文明を作り上げている「マテリアル(物質)」と自然環境を作っている「物質」の両者を化学と物理に基礎を置く「物質に関する科学」によって調和させ、人類に最適の状況を創り出すことを使命として、「『環境』と『環境に調和した材料』を勉強して地球を救おう」というモットーを掲げて毎日、熱心に、かつ楽しく研究し、勉強している。

環境問題にはさらにいろいろ複雑な側面があり、解決策を見出すために、より広い学問分野との協力が必要とされている。そのひとつは社会システムや法律などの関係である。この点について、マネジメントシステム学科との間で「環境マネジメント履修プログラム」をスタートさせる準備に取りかかっている。メディアサイエンス学科との間では、環境の制御や計測に不可欠のエレクトロニクス技術を学んだり、エレクトロニクス産業の環境汚染の実態などを学ぶ「環境エレクトロニクス履修プログラム」を準備している。バイオサイエンス学科との間でも環境が生体に及ぼす影響について学ぶ「生物環境履修プログラム」が検討されている。

林研究室

環境マテリアル学科 教授 林 剛 (e-mail: hayashi@ntu.ac.jp)

私の研究室では現在大学院生4人と卒研生4人がコロイドと界面化学の研究に取り組んでいる。非常に微細なコロイド粒子が散らばると液体や空気はチンダル現象を示すことがよく知られているが、界面は、固体・液体・気体の境界に存在するので、ユニークな性質を示す場合があり、その研究は環境と物質に関するさまざまな現象の究明と応用に役立っている。

環境に関する研究では、バイオサイエンス学科の学生と一緒に河川の水質分析を行い、水質浄化を必要としている現状を分析している。植物によるリン酸塩・窒素化合物の積極的浄化法あるいは有害成分が多量に溶存する場合に有効な吸着、イオン交換、沈殿・凝集・濾過などによる浄化法についても研究している。



化粧品用粘土の分散と凝集



現地水質分析スナップ

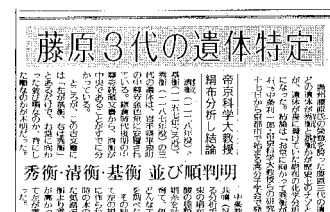
マテリアルに関する研究では、液体・固体の表面化学的性質を調べ、界面活性剤や高分子を用いて安定な懸濁液や乳濁液をつくる分散・凝集に関する基礎的研究とこれらを化粧品やシャープペンシルの芯として利用するための高純度精製技術を研究している。電子用セラミックスなどセラミックスの成形、塗料や固体潤滑剤の作製などに利用する幅広い応用研究も行なっている。排水から回収した水酸化アルミニウムの建設汚泥の急速固化への利用、酸化チタン微粒子の表面コーティングによる空気浄化用抗菌性フィルターの作製、 Eta ノール系セラミックススラリーの作製などエコマテリアル・ISO14000 関連のテーマも含まれている。卒業生は界面化学の知識と微細粒子を扱うノウハウを生かし、広い分野で活躍している。

自然科学と考古学の接点を求めて 環境マテリアル学科 教授 中條 利一郎 (e-mail: chujor@ntu.ac.jp)

大学のカリキュラムは超過密である。統計力学というのは、1個の原子や分子を扱っていたのでは出て来ない、温度や圧力の記述に不可欠のものである。筆者の大学時代これに4単位の講義が用意されていた。今は2単位である。それでいて、基礎だけでなく、実用的な事柄まで、教えなければならない内容は増えている。学生諸君が消化不良を起こさないようにするため、各教員はそれぞれの努力をしている。そのひとつに知識の体系の間口の広さを若干犠牲にして、奥行きを深さを保つのがある。筆者もそれをやっている。その結果、学生諸君が各学問の間口が狭いと誤解されては困る。ひとつでいいから、うんと離れたところに関連を求め、それを講義する。

筆者にとっては、それは考古学である。具体的な成果は新聞記事のとおりであり、字数の制限があるため、ここでは内容に立ち入らない。夕刊読売の5月14日版、日経の16日版、山梨日日の24日版を読んで欲しい。いろんな学問が有機的に結合しているのがわかる筈である。これが学問の楽しさである。

私の研究室で卒業研究や修士研究をやっている学生諸君は本当に楽しそうに研究をやっている。その楽しさを倍增させるには、化学は好きだが物理はいやなどとより好みしないことである。



平成11年5月14日 夕刊読売

マネジメントシステム学科 - 人材育成目標と履修プログラム -

マネジメントシステム学科 学科長 市川 光男 (e-mail: ichikawa@ntu.ac.jp)

マネジメントシステム学科では平成 11 年 4 月から新しいカリキュラムをスタートさせたが、来年 4 月から社会に出て役立つ実践的な人材の育成をめざして、教育の仕方にひと工夫もふた工夫も加えようとしている。まず、人材育成目標を明確に打ち出し、その目標を達成するために推奨される履修コースと履修プログラムを幾通りも準備していることである。高校生諸君は人材育成目標をよく理解して、入学志望を固めてほしい。入学した暁には、自分で選定した推奨履修プログラムの薦めるところに従って勉学を進めてほしい。教員・職員は学生諸君の勉学の支援を惜しまないであらう。

ところで、マネジメントシステム学科では何を学ぶのか。マネジメントシステムとは「企業経営の体系」である。マネジメントシステム学科は企業の経営活動の技法を科学的・工学的に学ぶところである。工学に基盤を置きたいわゆる「経営工学」は、品質・コスト・納期という経営の心臓部を支える学問である。この知識を核にして、学科ではさらに情報システム、キャッシュフロー、新製品の企画・開発、マーケティング、顧客サービスなど幅広い学習領域を用意し、企業活動の総合理解を目指している。消費者の動向をいち早くとらえ、環境問題や製造物責任などにも十分対応できる経営が求められる時代には、こうした複眼的思考が必要である。

学科の人材育成目標は、生産管理・品質管理を活動の中心とするマネジメントエンジニア、新しい事業を起こす起業家・家業を継ぐ事業後継者、新製品・新事業の企画スタッフ・開発者、経営情報処理に適したシステムエンジニア、介護福祉に工学的工夫を凝らす介護福祉エンジニア、キャッシュフロースタッフ、マーケティングスタッフ、セールスエンジニアなどがある。さらに、来年 4 月からはじまる他学科との複合履修プログラムを履修することによって境界領域に強い複合的エンジニアが育成されることになる。たとえばインターネットビジネスに強いシステムエンジニア、環境保全に力を発揮できる環境管理エンジニアなどである。

人間工学と介護福祉への新しい展開

マネジメントシステム学科 助教授 小川 家資 (e-mail: iiji@ntu.ac.jp)

少子化や超高齢化社会への時代の流れのなかで、使いやすさ、人にやさしい製品・設備や環境への配慮が求められるようになり、工場での生産性向上や効率化をめざしたいわゆる古典的な人間工学や IE(インダストリアル・エンジニアリング)は新しい展開を求められている。ただ単に人の特性を研究し、作業研究で生産性を向上させるといった固有の技術だけを追求すればよいという時代から、システム全体がその機能(目的)を発揮するためにそれぞれの分野がそれぞれの機能をしっかりと発揮することを求められる時代になっていると言ってよい。

この点を踏まえて、私は人間工学の授業で生活に密着した古典的人間工学と医療福祉や介護と関係する人間工学の新分野を分けて講義している。また、IEの授業では、工場のIEだけでなく病院などの医療システムへの展開を教えている。病院での患者取り違え事故に見られるように医療システムへのIEの参画が必要となっているからである。

私の研究室の卒業研究テーマは、洋式トイレなどの身近な設備・環境のもとでの人間工学的研究から介護や医療現場での姿勢研究、病院での業務分析など多岐にわたっている。そのほとんどは学生の独創的発想から生まれてきたテーマで、指導教員は研究の方向づけと研究内容の関連分野における位置づけについてアドバイスするだけである。学部の学生は国内の学会で研究成果を発表しているほか大学院修士課程の学生は国際学会で発表している。



疑似車椅子による介助実験

高度情報化社会に向けたエンジニア教育

マネジメントシステム学科 助教授 小林 和生 (e-mail: kobayasi@ntu.ac.jp)

マネジメントシステム学科の情報処理教育は全学生を対象としたワープロ、表計算、電子メールなどのコンピューターリテラシー教育にはじまる。コンピューターとそのネットワークが高度に発展し、インターネットや電子メール・電子掲示板などのグループウェアの利用が促進された結果、企業の情報システムが大きく変化し、経営首脳・研究者・一般社員を問わず、誰もが情報システムを使いこなせなければならなくなっているからである。

企業の情報システムは、企業の日常業務の中で生まれるデータの収集・管理システム、そこで得られた情報を活用して意思決定を支援するエンドユーザーコンピューティング、社員相互のコラボレーションを高め、生産性を向上させるグループウェアへと展開してきた。さらに最近ではインターネット技術を企業情報システムに活用したイントラネットやエクストラネットが経営の舵取りに不可欠の情報システムになっている。

このため、システムエンジニアを志望する学生諸君に対して、コンピューターを中心としたこれまでの情報処理教育に加えて、来年 4 月にメディアサイエンス学科に名称を変更する電子・情報科学科との間で複合履修プログラムを履修させ、「エレクトロニックコマース」を授業科目に加える。これは、こうした企業情報システムを運用・企画するシステムアドミニストレーターや企業情報システムを構築するシステムエンジニアの養成により一層力を入れようとしているためである。

体育 - 生涯学習を視野に入れた本学の保健体育カリキュラム -

保健体育科 教授 藤田 茂幸 (e-mail: fujita@ntu.ac.jp)

保健体育の教育目的は、人間の生存と活動の基礎となっている健康と体力について、科学的で合理的な運動を通して調和のとれた心身の発達を促し、人間形成をめざすことである。

本学の保健体育教育は、学生諸君自らが主体的に判断し、興味と関心をもったコースを選択する仕組みとなっていて、「健康と生活」(講義)と「体育」(実技)がバランスよく学習できるよう配慮されている。

体育実技は、学内で行う基礎実技と応用実技と学外で行う野外活動で構成されている。とくに、平成 2 年の開学以来つづけている野外活動は、夏期に行うテニス、登山、キャンプと冬期に行うスキーが好評である。

平成 9 年度から新しくスタートした野外活動コースとして、国立青少年教育施設が主催する各種の「指導者研修会」、青年を対象とした「登山・キャンプ等の研修会」あるいは自然体験的な野外活動への参加などがあり、いずれかに参加すると体育の単位が認定されることになっている。

体育・スポーツはある限られた時期に集中して行うのではなく、生涯の各時期に応じて継続的に運動することが必要である。子供から中高年、高齢者層への人生の展望の中で生涯学習をつづけ、健康と体育について科学的な知識と経験と自己制御できる精神力を身につけた学生が育ってくれることを期待しながら学習を進めている。

トピックス

300 台の教育用コンピューターと学内ネットワークのリプレース

電子・情報科学科 助教授 寺田 貢 (e-mail: terada@ntu.ac.jp)

情報処理演習室、システム工学実験室、マルチメディア教室などにある 300 台近いパソコンが夏休み中に更新された。このコンピューターが後期からの各学科の情報処理関係の実習・演習や外国語科目の「インターネットと英語」などの教育に使われることはいうまでもないが、今回は、コンピューターを接続するネットワークも一新されたので、教職員はもちろんすべての学生諸君がメールアドレスを持って電子メールやインターネットを利用できるようになった。

これによって授業のレポートを電子メールで提出したり、大学のホームページに設置される掲示板で学生諸君への連絡や学生諸君から先生方への連絡ができることになった。今回はとくに教室だけでなくロビーなど学生諸君が集まりやすいところにネットワークに接続する情報コンセントが設置されたので、学生諸君は自分のノートパソコンをネットワークにつなぐことによってマルチメディア時代のキャンパスライフを送れることになった。

地域連絡協議会開催

帝京科学大学 事務局長 飛田 眞澄

帝京科学大学では地元との相互理解と親善・協力関係を深めることを目的として「地域連絡協議会」を開催してきたが、本年度第 1 回協議会が上野原町、同商工会、同青年会議所、県高等学校校長会、マスコミ関係者を迎えて 7 月 27 日に開催された。

本学を取り巻く最近の状況を交えた小林学長の挨拶につづいて、公開講座、共同研究などの大学の現状、バイオテクノロジー研究センターの設置、電子・情報科学科の学科名称の変更など大学の将来計画が説明されたあと、瀧澤副学長の司会で「地域と大学の連携」のあり方をめぐって懇談が行われた。

上野原工業団地の見学会を含むインターンシップの実施、桂川の水質・環境調査に関連して、山梨県および神奈川県との環境関係研究機関との共同研究、学生の自主的な活動に関する報道を通しての大学広報の充実策、

上野原・都留・大月地域 3 大学連携による大学と大学教育の PR、TUST 産学共同研究会の継続要望など本学の運営に生かされるべき貴重な意見が数多く出された。

協議会終了後実験研究棟の実験室の見学とあわせて屋上から上野原サイエンスアンドテクノパークの景観と広々とした学生用駐車場を展望し、散会した。

バイオテクノロジー研究センター着工

総務課 総務係主任 加藤 克仁 (e-mail: kato@ntu.ac.jp)

文部省の「ハイテクリサーチセンター整備事業」に「帝京科学大学大学院バイオテクノロジー研究センター」が選ばれ、8 月 18 日に起工式が行われた。平成 12 年早々に表紙の写真のような建物が完成する予定で、遺伝子機能に注目して、環境浄化、品種改良、生体物質生産などのバイオ関連分野の先端研究が展開される。

編集後記: TUST ニュースレターがスタートしてから 2 年、第 4 号が完成した。創刊 1 号と 2 号は本学の研究活動に、第 3 号は主として 1 年生と 2 年生の教育についての努力を紹介した。この第 4 号は 3 年生と 4 年生の専門教育、とくに卒業研究を視野にとらえて紹介した。

大学全入時代を迎えるにあたって、本学がどのような考え方に立って、どのような改革を進めようとしているのかを読み取っていただければ幸いである。本学の際立った特徴のひとつは規模が小さいことである。本学の 1 年生と 2 年生の教育のモットーは「小人数手作り教育」。来年 4 月から実施される「複合履修プログラム」は 3 年生と 4 年生の専門教育についての他に見られない本学の特徴となり得るものである。

本学はよい意味で規模が小さいのできめ細かな改革が迅速に行われている。第 3 号と第 4 号で紹介した大学全体の改革への意気込みと学生諸君が勉学に励む様子が少しでも伝われば幸いである。

TUST ニュースレター編集会議メンバー 電子・情報科学科 助教授 木村 龍平 (e-mail: kimura@ntu.ac.jp)